

# 論語讖について

中村 璋 八

## 一. 序

所謂緯書類には、七經の緯、即ち七緯（易<sup>(1)</sup>・書<sup>(2)</sup>・詩<sup>(3)</sup>・礼<sup>(4)</sup>・樂<sup>(5)</sup>・春秋<sup>(6)</sup>・孝經<sup>(7)</sup>）のほか、河図・雒書<sup>(8)</sup>・尚書中候<sup>(9)</sup>も含まれるが、またそれらとは別に論語讖（又は緯）も存在する。

この「論語讖」の名は、白虎通に易乾鑿度・書刑徳放・尚書中候・礼含文嘉・礼稽命徴・樂稽耀嘉・樂動声儀・春秋潜潭巴・春秋元命苞・春秋感精符・春秋含文嘉・春秋讖・孝經援神契・孝經鉤命決・孝經讖などの所謂七緯を主とする緯書と共に「論語讖曰、五帝立師、三王制之」（卷四、辟雍）と、その佚文と併せて記されている。その記載から考えても、論語讖は、七緯と同じく、後漢初期には、既に存していたことは確かである。

しかし、隋書經籍志の讖緯の部には、その名がなく、また「其書出於前漢、有河図九篇洛書六篇、云自黄帝至周文王所受本文。又別有三十篇、云自初起至于孔子、九聖之所増演、以広其意。又有七經緯三十六篇、並云孔子所作。并前合為八十一篇。而又有尚書中候、洛罪級、五行伝、詩推度災、汜曆枢、含神霧、孝經鉤命決、援神契、雜讖等書。漢代有邴氏、袁氏説。漢末、郎中邴萌集図緯雜讖占為春秋災異、宋均、鄭玄、並為讖律（緯）之注」と、讖緯書を分類して、その性格を説いているが、その記載の中にも論語讖の名は見えない<sup>(10)</sup>。だが隋志の載せるところの梁の七録には、孔老讖十二卷、老子河洛讖一卷、尹公讖四卷、劉向讖一卷、雜讖書二十九卷などの讖書と並んで「論語讖八卷、宋均注」と、七緯の注をも施した宋均の注をも含んで、論語讖の名が記されてい

る。これから推すと、論語讖も、後漢初期より魏晋南北朝にかけて、七緯と共に通行し、宋均は、七緯と同様に論語讖にも注したことが知られる。

降って旧唐書経籍志になると「論語緯十卷、宋均注」とあり、新唐書芸文志にも、また「宋均注、論語緯十卷」と記されて、「讖」が「緯」に、「八卷」が「十卷」に改められている。これから推すと、唐代には、論語讖は、他の讖書類とは区別されて、七緯と並び、その地位が向上し、重用されるようになったとも考えられる。このことは、現存の論語讖の佚文が、主として唐代の文選李善注を始めとして、開元占経、十三経の疏などに散見し、それ以前の文献としては、東晋の陶渊明の聖賢羣輔録と隋の杜台卿の玉燭宝典に二、三残存するのみであることから明らかである。しかし、唐以後は、他の多くの緯書とともに、目録類からは、その名を消している。

日本国見在書目録（891～897）には、他の緯書類が、殆んど全て記されているにもかかわらず、論語讖のみは、その名が見えず、また、我が国の文献にも、他の緯書の佚文が見存するのに、この書のみは、殆んど引用を見いだせない。このことは、日本には論語讖のみ将来されなかったことを示すのであろうか<sup>(11)</sup>。もし、そうであれば、諸緯が我が国の各時代を通して盛んに用いられていた<sup>(12)</sup>のに対し、如何なる理由で除外されたのであろうか。これは、論語讖と他の緯書との性格の相違にも拠ると思われるが、もう一つの理由は、しばしば指摘した<sup>(13)</sup>ように、緯書は、日本には唐以前に伝来したもので、隋志の記載の如く論語讖は含まれてはいなかった、と推測できる。これから推すと逆に、見在書目の緯書に関する記載は、隋志をそのまま踏襲したのではなく、当時、日本に現存していた蔵本と対照して、編者、藤原佐世が記録したものと考えられる。この緯書類は、平安朝以後も、商人達の手などを経て、しばしば将来されたが、それを記す目録類にも、論語讖の名は全く見いだせない。

## 二．論語讖の篇名

論語讖は、前述のように、既に白虎通に、その名が見えるが、他の諸緯が、その篇名をも記しているのに対し、この書には、篇名が記されていない。篇名が初めて見えるのは、東晋の陶渊明（潜、365～427）の作とされる聖賢羣輔録

(一名，四八目)である。この書には「論語摘輔象」とその佚文が存する。この聖賢羣輔録は，従来，陶淵明の作としては軽視され，四庫提要などに至っては，その書は偽託である，とまで断じている。しかし，石川忠久氏<sup>(14)</sup>は，聖賢羣輔録を五孝伝，搜神後記と共に，陶淵明の史家としての特質を示す重要な著作であると位置づけている。この書は，「四八目」と言う一名が示すように，主に四人一組，八人一組の人物を列挙して，簡単な解説をつけ，それが記載されている出典を明らかにしたものであり，論語摘輔象の篇名とその佚文は，その首に記されている。これから推すと，東晋の頃には，既にその篇名も具っていたと思われる。ついで，隋の杜台卿の撰になる玉燭宝典（十二卷，原闕一卷，古逸叢書所収，また尊経閣文庫に卷子本が蔵されている。）巻四に「論語隆嬉效云，聖人用機之数，順七宝」と「隆嬉效」（或は陰嬉效の誤りか）という篇名が記されている。唐以前の文献に論語讖の篇名が記されているのは，この「摘輔象」と「隆嬉效」の二篇のみであるが，唐の文選李善注に至ると，比考（讖）・撰考（讖）・摘輔象・摘襄聖（承進讖）・素王受命讖・糾（一作糺）滑讖・陰嬉讖の八種の篇の名と，そのそれぞれの佚文とが散見する。論語讖の篇名は，李善注のほか，芸文類聚，北堂書鈔，初学記，唐類函，太平御覧などの類書や開元占経，後漢書注，路史注などに，その佚文と共に見えるが，摘襄聖を，御覧が一に摘襄聖に，初学記が摘衰聖に，また安刻本が摘衰聖承進讖に作るなど，若干の文字の異同は存するが，李善注所引の八種以上には，論語讖の篇名は見いだせない。

輯佚書は，古微書，緯書<sup>(15)</sup>などが比考（讖），撰考（讖），摘輔象，摘衰聖，陰嬉讖の五篇を収め，緯攬，玉函山房輯佚書，集緯<sup>(16)</sup>などが，前述の五篇に素王受命讖，崇爵讖，糾滑讖の三篇を加えて八篇としているが，これらにも李善注所引の八種以外の篇名はない。すると，論語讖（緯）の篇は，李善注所引の八種が全てであることになる。これは，隋志の引く七録の「論語讖八卷」の「八卷」と符合する。これから推すと，或はこの八卷は，論語讖の八種の篇を，それぞれ一卷に収めていたと考えられる。では，唐志の「論語緯十卷」の「十卷」は如何なる内容であったか，ということになるが，これは，量の多い篇，例えば，比考（讖）や摘輔象を，唐代になってそれぞれ上下二卷に分けた

とは考えられないであろうか。ただ、黄氏逸書考は通緯に摘輔象と摘衰聖の二篇を取り上げ、他を讖書として後に附している。これから考えると、或は摘輔象と摘衰聖が、特に重要なものであったとも推せるので、この二篇が上下二巻に分けられていたであろうことも考えられる。何れにせよ唐志の「十卷」は、このように理解できるのではなからうか。

### 三．讖名の特色

論語讖（緯）の、この八種の篇名は、他の七経の緯とは異り、摘輔象、摘衰聖（ただ、この篇は、後に承進讖の三字が附せられることもある）の二篇のほかは、緯書の多くの篇名が殆んど三字よりなっているのに対し、二字（素王受命讖は別として）よりなり、その後「讖」の字が加えられている。これは、明らかに七緯とは、篇名だけから見ても、性格の異なることを示しているものと思われる。しかし、現存の論語讖（緯）の佚文を検すると、所謂「讖」と言われる書が、主として星辰などの天文現象や地変に拠る断片的な予言を記した類のものが多いのに対し、孔子やその弟子、顔淵、曾参、樊迟、子遊、子夏、子貢、子路などの事跡や異常な容貌、または黄帝、堯、舜など古代の帝王の政治を論じた記事が多く、むしろ、その性格は、七緯や尚書中候に近い。では、論語讖（緯）は、緯書の中であって、始何なる位置を持つ書なのであろうか。以下、各篇の篇名や佚文を検討しながら考えてみよう。

### 四．論語讖の分類

論語讖の篇名は、前述の如く摘輔象、摘衰（一作襄・衰）聖の二篇のように、他の緯書と同じく三字よりなるものと、比考（讖）・撰考（讖）・素王受命讖・崇爵讖・糾（一作糾，糾，紀）滑讖・陰嬉讖の六篇のように二字または四字の後に「讖」の字を加えたものとの二つのグループに分けられる。清の黄奭は、その輯した黄氏逸書考<sup>(17)</sup>で、前者の二篇を「通緯」に収め、後の六篇を「附讖」の項に収めており、両者を明確に区別している。しかし、二つに分けた理由は、全く述べていない。ただ前者を「緯書」とし、後者を「讖書」とみなしていたことは確かであろう。

そこで、今、「重修緯書集成卷五<sup>(18)</sup>」を資料として、その篇名と佚文とを検討して、それぞれの篇の性格を考察して行くこととする。

## 五．各篇の性格

摘輔象は、論語緯（讖）中、最も多くその佚文を残存し、三十一条に達する。その各条を検すると、「倏人出天，四佐出洛」「伏羲六佐出世」「黄帝七輔，州選挙，翼佐帝徳」（共聖賢羣輔録所引）など、伝説上の帝王である倏人，伏羲，黄帝の輔佐に就いての記事のほかは，その殆んどが孔子とその弟子である顔淵，子路，子夏，子張，曾参，仲弓，樊遲，宰我，子游，公冶長などが，素王，または素王の司空，司徒であることを論じたり，それらの人々が特異な容貌を具えていたことを力説したものである。この記載から推すと，摘輔象は，古代の帝王，または素王である孔子を輔佐する人々に就いて記した篇，と考えられる。では，「摘輔象」という篇名は，始何に解すべきであろうか。

「摘」または「擿」の字を用いた篇名は，この篇のほかにも，雑書摘六（一作亡）辟と尚書中候擿洛戒<sup>(19)</sup>とがある。陳槃氏は「古讖緯書録解題四<sup>(20)</sup>」の「雑書摘六（亡）辟」の項で「今按摘同擿，発也」と，「摘」または「擿」は「発」の意であるとし，「摘或引作擿，古籍中有此比，如論語擿輔像，擿或作摘，（中略）二字音同，又並有発義」とし，また，摘雜戒の篇名を「擿発此雜書，垂為訓戒耳」と解している。このように「摘」または「擿」を「発」の意とすることは妥当な見解と思われる。次に「輔」の字は，河図挺佐輔<sup>(21)</sup>などの篇に用いられ，また，摘輔象の佚文も，古代の帝王，または孔子を輔佐する人々に就いての記事が殆んどであるように「輔佐」または「佐輔」の意であろう。「象」は，或は「像」または「相」にも作るが，鄭玄が「象猶貌也」と注するようになり，何れも「かたち」の義であろう。そこで，「摘輔象」は，「帝王，または素王を輔佐する人々の象（貌）を摘発した篇」となり，その残存する佚文の内容とも一致する。

次に摘衰聖は，「衰」を一に「襄」または「褰」に作っている文献もあるが，後に説く如く「衰」が正しいと推せるので，「襄」「褰」は，衰と字形が似ている為に誤ったものであろう。また，摘衰聖の後に「承進（讖）」の二字（御

覽)又は三字(文選注)を附したのものもあるが、それは、他の緯書の篇名が殆んど三字よりなっているのとは極めて異なる。或は承進讖は、摘衰聖の別名か、または、その書の章の名<sup>(22)</sup>とは考えられないであろうか。この摘衰聖の佚文は、明確なものは三条に過ぎない。それは、帝・王・覇の在り方、鳳に九像六苞があること、徐衍が分を守り、身が亡んだことを述べた条である。これらの佚文からは、摘衰聖の意味を明らかにはしえない。しかし、この篇と似た篇名が雑書に見える。それは「摘亡辟」である。この「亡」を一に「六」(易通卦驗)または「三」(路史注)に作るが、陳槃氏も論ずる如く、「六」または「三」は誤りであろう<sup>(23)</sup>。摘亡辟の「辟」は、爾雅釈訓に「辟者君也」とあるように「君」の意であろう。すると、この篇は、陳槃氏も説くように「亡国の君(辟)を挙発(摘)、即ち表著した篇」ということになる。易通卦驗の引く雑書摘亡辟には「亡秦者胡也。丘以推秦，白精也。其先星感河出凶，以胡誰亡。胡之名行之，名行之胡，秦為赤軀，非命王」など<sup>(24)</sup>、その篇名に合す文も見存する。もし、摘亡辟の篇名を斯くの如く解することができるのであれば、摘衰聖は「衰亡した聖賢を摘発した篇」と解することができるのではあるまいか。このような立場で残存の佚文を検すると、衰亡した聖賢とは、帝・王・覇であり、また徐衍であり、その聖賢と結びつくものが鳳であった、との見方もできる。

論語讖(緯)には、三字よりなる緯書的篇名のもののほか、所謂、讖類とされる篇が六篇ある。その中で、比考(讖)と撰考(讖)の二篇は、割合にその佚文が多く、何れも十七条を残存する。これらの佚文も、極めて断片的であるが、その多くは、黄帝、堯、舜、禹、湯王など上古の帝王より、孔子とその弟子達に至る、それぞれの人物の事跡を記したものである。古微書の編者、孫穀は、その篇首に比考を「蓋以上比之三王，下自考也」と説き、また「比考之外，別有撰考，不言讖，實讖文也」と、撰(撰)考に就いて述べている。更に朱彝尊は、經義考卷二百六十七、愆緯五で「接論語讖，雖有比考・撰考之目，諸書所引，往往互見，(中略)為比為撰，不能尽別也」と、比考と撰考とは、その篇名は異なるが、その佚文の内容から見た場合、区別することはできないことを指摘している。この両篇に用いられている「考」の字は、尚書考靈曜、尚書中

候考河命など、緯書の篇名には屢々見られ、また「考」と同じ意味と思われる「稽」の字も、易稽覽図、礼稽命徴、楽稽耀嘉など多く見いだせる。この「考」または「稽」は、既に二・三の論<sup>(25)</sup>で述べた如く「考察する」の意であろう。しかし、比考、撰(譔)考の「考」とは、その用法が異っている。ただ、前に掲げた両篇の残存する佚文から推すと「上古の聖王の事跡を以て、これを夏殷周三代の王の事跡と比べたならば、自然と後世の事象は考察することができる、という立場で記した篇、または讖(予言)」とは解せられないであろうか。

素王受命讖は、「王者、命を受け、政を布き、俗を易え、以て八極を御す。」  
「河、図を授け、天下、心を帰す。」(共文選注所引)などの佚文があるように「素王(無冠の帝王)である孔子が天の命を受けることを記した讖」と考えられる。

崇爵讖は、その佚文に「子夏は共に仲尼の微言を撰し、以て素王に当つ。」(文選注)とあるように「弟子達が、素王という孔子の爵(位)を崇んで記した篇(讖)」と推測できる。

糺(一作糾、紀、糾)滑讖は、見存する佚文が二条のみであり、そこから篇名の意を推測することは困難であるが、「糺」は、論語摘輔象に「知命受糺(糾)俗」(聖賢羣輔録所引)とあり、宋均は「糺(糾)正也」と注していることから「正」の意と解せられる。「滑」は国語周語下に「滑夫二川之神」とあり、その章氏解に「滑乱也」とあって「乱」の義と推せる。この篇名の字解と、佚文の「漸漬以道、廃消乃行」や「陳滅斉、六卿分晋」(共文選注所引)などと考え合せると「乱を正すところの讖(編)」とは考えられないであろうか。

最後に陰嬉讖は、星占を主とする佚文が十三条見存する。陰嬉讖の「嬉」は、孝経威嬉拒などにも用いられるが、論語摘輔象に「隕蘆受延嬉」(聖賢羣輔録所引)の句が存し、その条に宋均は「嬉興也」と注して、「興」の義としている。また、陰嬉讖の佚文には「桀、竜逢を庚子の日に殺す。金版あり、庭中に出づ。刻に曰く、臣の族、王禽を虐す。」(文選注)とあり、その他は、多く星辰に関する条である。この篇名と佚文とからすると「陰(悪事、災異など)が興ることを予言した篇」とも理解できる。

## 六. 結 語

以上、論語讖の各篇の性格を検討したのであるが、それぞれの篇の佚文も少なく、その篇名も、必ずしも明確ではないため、無理な理解をしたという誇りは免れないと思う。そこで、更に緯書全体の篇名からする詳細な考察が必要となるが、それらは今後の課題とする。

論語讖（緯）は、篇名から考えた場合、黄氏逸書考の如く、緯書的な摘輔象と摘衰聖の二篇と讖的な他の六篇とに区別することは可能であろう。しかし、讖的なものとされる各篇の佚文にも、「君子上達，与天合符」（比考＝憲問）「聖王御世，河竜負卷舒図」（比考＝子罕）「殷惑女姐已，玉馬走」（比考＝微子）「孺悲欲兒，郷黨慕義」（撰考＝陽貨）「下学上達，知我者其天乎，通精曜也」（撰考＝憲問）「子罕言利，利傷行也」（撰考＝子罕）「百世可知，言喻道也」（崇爵＝為政）など、論語の本文と密接な関わりを持つ条が極めて多い。その点から推すと、他の緯書が釈経を重要な要素としているのと、その性格が似ており、讖類が天文占を中心とする、所謂予言の書であるのとはやや異っている。

緯書は、隋書経籍志が、或る説として「孔子、既に六経を敘し、以て天人の道を明らかにするも、後世、その意に稽同する能はざるを知る。故に緯及び讖を立て、以て来世に遺す」と、述べている如く孔子を緯書の作成者に擬える思想は、後世も根強く存した。これは、既に漢の荀悦（148～209）の撰とされる申鑑にも「世、緯書は孔子の作と称す」（俗嫌篇）ともあり、この思想が古くから存したことを示している。このように、孔子を作成者とすることによって、緯書を經書と並ぶ権威のある書としようとする記載は、緯書自体の中にも屢々見られる<sup>(26)</sup>。そこで当然、緯書中にも孔子に関する記述も多い<sup>(27)</sup>。そのことは、孔子の言行を記した論語も、讖緯書の中にあって、重要な位置を占めることになる。それが、論語篇（緯）という形で表われたのであろう。

では、七経（易，書，詩，礼，楽，春秋，孝経）が、それぞれ、「緯」を持つのに対し、何故、論語のみ「讖」とされたのであろうか。班固（32—92）の漢書芸文志、六芸略には、六経（易，書，詩，礼，楽，春秋）の後に、論



語、孝経、小学の諸本が記載されている。これから推すと、論語は、緯書の作成せられた漢代には、六経や孝経と並べ称されていたことになり、論語讖のみ七経の緯と区別される理由は存しない。ただ、孝経緯は「志は春秋に在り、行は孝経に在り」（孝経鈎命決）などと記される如く、孝経が、春秋と並び、緯書中で重要視されていたため<sup>(28)</sup>、六経の緯と共に緯書の中に、その位置をえ、論語讖のみ、それらとは区別されて「讖」の字が附せられて通行した、とは考えられないであろうか。

しかし、元来は、所謂「讖書」とは、別の範疇に属する書であり、それは、論語の経文を釈することを主軸とし、素王である孔子と、その弟子達の風貌や事跡を記すことによって、それらの人々を権威化し、孔子の作成したものであるとされる緯書の信憑性を主張しようとしたのが、この「論語讖」であった、と言えないであろうか<sup>(29)</sup>。

#### (註)

- (1) 拙稿「易緯の佚文より見たる現行本易緯の性格について」（内野博士還暦記念東洋学論集所収）参照。
- (2) 拙稿「尚書緯・尚書中候について」（重修緯書集成巻二所収）参照。
- (3) 拙稿「詩緯についての二・三の問題」（漢魏文化第二号所収）参照。
- (4) 拙稿「礼緯について」（漢魏文化第四号所収）参照。
- (5) 拙稿「楽緯について」（重修緯書集成巻三所収）参照。
- (6) 拙著「緯書の基礎的研究，資料為」第二章，各緯における諸問題，六，春秋緯の項参照。
- (7) 拙稿「孝経緯とその篇目について」（駒沢大学外国語部研究紀要第二号所収）参照。
- (8) 拙著「緯書の基礎的研究，資料篇」第二章，各緯における諸問題，九，河図，洛書の項参照。
- (9) 拙稿「緯書中における尚書中候の位置」（駒沢大学外国語部研究紀要第四号）参照。
- (10) 或は「雑讖」とある中に論語讖も、他の讖書と共に含まれているとも考えられるが。
- (11) もっとも、職制律に「凡玄象器物，天文図書，讖書，兵書，七曜曆，太一雷公式私家不得有，違者徒一年，（私習亦同）其緯候及論語讖，不在禁限」と論語讖の名が見えるが、この記載は、唐六典唐律を、そのまま襲ったもので、この

記事によって、日本に論語讖が存したことを証明することはできない。また見在書目、五行家の部に「孔子讖記一」との記載がある。しかし、この孔子讖記と論語讖とが如何なる関係にあるかは、孔子讖記の佚文が有しない現在は、明確にはしえない。

- (12) 拙著「緯書の基礎的研究, 資料篇」第一章, 緯書資料における問題の所在, 四, 日本における緯書資料, 及び拙稿「日本に残存せる緯書佚文の新資料」(日本中国学会報第十二号所収) 参照。
- (13) 拙著「緯書の基礎的研究, 資料篇」第二章, 各緯における諸問題の各項参照。
- (14) 石川忠久氏「史家としての陶淵明」(桜美林大学中国文学論叢第一号所収) 参照。
- (15) 拙稿「内閣文庫本『緯書』について」(漢魏文化第六号所収) 参照。
- (16) 拙著「緯書の基礎的研究, 資料篇」第一章, 四, 緯書資料の輯佚書とその研究, 参照。
- (17) 拙稿「重修緯書集成卷三補遺」(駒沢大学外国語部論集第三号所収) の中で, 黃氏逸書考について紹介してある。参照されたい。
- (18) 安居香山, 中村璋八編「重修緯書集成卷五, 孝経, 論語」(明德出版社刊, 昭和47年度文部省出版助成図書)
- (19) 拙稿「緯書における尚書中候の位置」(駒沢大学外国語部研究紀要第四号所収) の中で「撻維戒」について記した。参照されたい。
- (20) 陳槃氏「古讖緯書解題四」(中央研究院歴史語言研究所集刊第22本所収)
- (21) 河図の各篇については陳槃氏が「古讖緯書録解題五」(中央研究院歴史語言研究所集刊第44本, 第四分所収) の中に解説がある。ただ河図挺佐輔については前掲の「解題四」に記されている。
- (22) 例えば「孝経援神契五刑章」などの例もある。
- (23) 陳槃氏「古讖緯書録解題四」(前掲) の「雜書摘六辟」の項, 参照。
- (24) 前掲の書に, 他の例も列挙されている。
- (25) 拙稿「詩緯についての二・三の問題」(漢魏文化第二号) 「思想上より見たる尚書緯と尚書中候の特質」(漢魏文化第三号) など。
- (26) 例えば春秋演孔図に「邱攬史記, 援引古図, 推集天変, 為漢帝, 制法陳敍図録」(公羊陰元年疏) 尚書緯に「孔子求書, 得董帝玄孫帝魁之書, 迄於秦穆公, 凡三千二百四十篇, 断遠取近, 定以為世法者, 百二十篇, 以二百二篇為尚書, 十八篇為中候」(書, 序疏) などがある。
- (27) 安居香山氏「孔丘秘経考」(内野博士還暦記念東洋学論集所収) に, その事例が挙げられているので, それを参照されたい。
- (28) 拙稿「孝経緯とその篇目について」(駒沢大学外国語部研究紀要第二号) 参照。
- (29) 論語讖は, 最も古い緯書の輯佚書である説郛(明鈔本, 重較) や古経遺緯には

収められていない。しかし、河図や洛書は収めている。その理由は記されていないが、それが、それらの輯佚書の緯書に対する見解であったのであろう。また、最も秀れた輯佚書である七緯は、当然のことながら、河図、洛書と共に論語讖は除いている。その他の輯佚書の多くは、河図、洛書、論語讖ともに収めている。

(昭和50年9月30日)

[附 記]

この論考は、安居香山氏との共編「重修緯書集成、卷五、孝経・論語」の解説として書いたものの内、論語讖についての部分を、検討し直し、書き改めたものである。その解説は、頁数の関係で、二頁という極めて簡単なもので、十分に意を尽すことはできなかったが、ここでは、やや詳細に述べ、論語讖の性格をやや明らかにすることができた。しかし、まだ多くの問題は残されている。今年度、桜美林大学において、「論語と論語讖」という講義題目で、論語讖を、論語との関わりを考えながら読んでいる。その成果は、この論考では全く採り上げることができなかったが、今後の研究の資としたい。

(昭和51年1月10日)